

短歌表現の研究

短歌講座 ■ テキスト2

日本文化スクール

短 歌 講 座

テキスト2 短歌表現の研究

発行所 日本文化スクール
東京都新宿区百人町2-1-11
(〒169)

発行人 品川 實

印刷所 凸版印刷株式会社
組 版 東京タイプレスセンター

911

テキスト ②

短歌表現の研究

より豊かな表現を身につけるために、枕詞、序詞、比喻などの修辞法を学びます。さらに歌のもつ流れるような美しさを「百人一首」によって味わってみましょう。

目次

第一章	よりよく表現するために	3
第一節	句と句の相互関係	3
第二節	連作の意義	6
第三節	古語の生かし方	12
第四節	比喻について	20
第五節	余情のもつ意味	26
第六節	批評こそ上達への道	30
第七節	スランプに陥ったら	36
第二章	添削実例	40
第一節	季節の歌	40
第二節	恋の歌	43
第三節	社会の歌	44
第四節	友人・知人の歌	45
第五節	家庭の歌	46
第三章	知っておきたいこと	49
〔附〕	百人一首	54

よりよく表現するため

句と句の相互関係

五・七・五・七・七の三十一音から成り立っている短歌は、五句の一句一句の言葉が互いにつながり合って一気に通った形にならないのです。一句一句が、たとえどんなに美しい詩的な言葉の雰囲気をもっていても、句と句の相互関係が稀薄で、この一首の歌の中でいっただい作者は何をいわんとしているのかさっぱりとわからない、というような場合がときにあります。ただ言葉を羅列しただけでは、短歌本来の命は表わせないのです。

また、例えば一句・二句・三句を合わせて一つの流れをなす上の句と、四句・五句を合わせた下の句が文脈としてつながらず、まるでかけ離れた内容と表現をもった歌の場合は、一首全体の感じが好意的にみてもよくつかめないことがあります。批評する側はこのような場合、かなりつつ込んで歌をけなしたりするものですが、これはまだ短歌の本質をよく理解しきれていないからです。読む人の側によく理解してもらえないようでは真実の作品とはいえないのです。

目先の言葉だけに頼りすぎ、言葉が先に立ってしまっただけでできた歌の場合には、一句一句からなる句全体のまとまりがなくなり、作者の感動を読む人に伝える力が弱くなるものです。それにひきかえ、直感的にひらめいた感動をそのまま直接歌の中になだれ込ませたような場合は、自分でも思いがけない表現、内容ともに一気に通った歌ができるものですが、あらかじめ机の前に座って、さてこれからの歌を詠もうなどと構え、あれこれ言葉を探

しているようなときには、苦勞したわりには、想念がきれぎれのつまらない歌になってしまふものです。

また短歌は、五句三十一音から成るわけですが、その一句一句の言葉には言葉独自の働きがあり、一句一句の意味を確かめねばなりません。例えば、花につく言葉は「花が散る」「花が咲く」などが普通で、「花が笑う」「花が泣く」という切り取り方は、詩的雰囲気をかもし出そうとして好んで強調して用いる虚構の世界ですが、これでは主観が勝ちすぎて、かえって詩的情緒が失われてしまいます。この虚構の世界を作る方法には限度があります。「鳥が啼き」「鳥が唄う」といいますが、「鳥が咲き」「鳥が散る」となりますと飛躍が極端すぎていかにも嘘っぽく、実体のない空虚なものになってしまいます。もちろんこれは一つの話のたとえで極端すぎますが、これに近い例はかなりあるのです。このように一句一句の言葉一つに細かくゆきとどいた神経が必要なのです。

日本では、古くから「歌合」という短歌の遊戯がありました。「歌合」というのは、その場に集まった幾人かの歌人が左右に分かれ、それぞれの詠んだ歌を左右一首ずつ組み合わせ、あらかじめ定められた判者が優劣の数を確かめて勝負を決める、という遊戯で、平安朝の初め頃から宮廷や貴族の間などで盛んに流行した優雅な遊戯です。現代でもその形をいくぶんまねてお正月などに友人、知人、家族などが集まって歌合をしたり、その延長とていか砕いた形として「歌の語句合わせ」を気楽に行ったりします。五人一組になって、それぞれに五・七・五・七・七の言葉を考え、紙片を用意して一人一人の頭に浮かんだ言葉を書きつけます。どんな言葉でも自由に思ったままを、自分の割り当てられた五字または七字で書き表わします。ときと場合によりますが題詠のこともあります。その一片一片の句を寄せ集めて一首の歌を組み立てるのです。「ふる雪は」「花につもりて」「立ち止まり」「われはしばらく」「眺めてをりぬ」というふうな形です。もちろん、ある程度まとまりのある歌ができることもあります。いざふたをあけてみますと、奇想天外なものや、割合地味でおとなしいものや、まれには美しい抒情的なものなど、さまざまな歌ができ上がります。五人は共犯の形ですから、皆どきどきしながら待ち構えているわけです。集ま

ったそのときのメンバーの顔ぶれにもよりますが、あまり歌に馴染のない人の集まりなどでは、選択する言葉も、かなり俗っぽいものなどがあったりして、川柳や狂歌のような傑作も生まれるなどして、一同が思わず吹き出してしまいうこともありませう。

このようなゲームは歌の上達とはあまり関係はないのですが、言葉というものの切り取り方というような言葉についての勉強であったり、また頭の回転の訓練にもなるぐらいに気楽に考えて、それなりに楽しめばいいと思います。

短歌における句は、五・七・五・七・七と一句一句がそれぞれに独立した句の性格をもっているながら、三十一音でつながって一首の歌として完成しているものですが、この完成された一首を、細かく分析してみることも必要なことです。例をあげて考えてみましょう。

(古今集)

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行朝臣

歌意——秋がきたと目にははっきり見えなけれども、風の音でああ秋がきたのだなあ、と自然に気がついて、はっと目を見はるように心を打たれるのです。

では、この一首の歌を文節に切ってみたらどうなるかというところ

秋 来ぬと 目には さやかに 見えねども 風の 音にぞ おどろかれぬる

このように八つの単位に区切ることができます。さらに、この文節をもっと細かく分解して、単語にほどいてみることもできます。

秋 来 ぬ と 目 に は さ や か に 見 え ね ど も 風 の 音 に ぞ お ど
ろ か れ ぬ る

連作の意義

と、十九の単語になるのです。この一つ一つの単語は言葉としての最小の単位で、意味および文法的な働きの上からも、もうこれ以上細かく分解することはできないものです。これらの単語の一つ一つの果たす役割が、大切な文章の基本となるわけです。

短歌は三十一文字の短い言葉で、完全に一首一首が独立した形をもっていなければならぬ、まことに厳しい小詩型の文学です。独立した一首一首の背後には、短い三十一文字では到底語りつくすことのできない、さまざまな人間の情感が詰め込まれているはずで、一首の歌を組み立ててゆく一句一句の言葉を解きほぐして、その折々の感動のおもむくままに書き並べていったとすると、どのぐらいの長さにひきのばすことができるでしょう。一首の中に込められ、短く短く凝縮され、選びぬかれた言葉によって構成された三十一文字の中の感情は、もうこれ以上ない密度の濃いものでなければなりません。

このようにその感情は、凝縮され、言葉は精選されて表現に至っているわけですが、これには限度が生じます。つまり、一首の中だけではどうしても言いつくせないほとぼる感情の流れや、直面した事実の大きさが、ありあまって盛りきれないことがあります。

*連作という一つの方法がこのようなときに、ぜひとも必要になってくるのです。連作は自ら溢れ出る情感や、遭遇した体験を、つぎつぎ一首一首に盛り込んで、複雑な内容をより立体的に表わそうとするときに、多く試みられるものです。

一首一首が他の一首と互いに助け合いながら、一首の短歌では表現しきれない内容を、連作という構成の力を借りて、より印象を鮮明なものにする手法です。

その一例を万葉集にたずねてみましょう。

*連作 一人の作者が一つの材料でいくつもの歌をつらね作って、その一連全体としてもある味わいを出そうとする短歌の一作法。唱えたのは伊藤左千夫だが、「万葉集」のなかにも無意識に連作になっているのが見られる。

額田王ぬかだのおおきみの近江国いみのくにに下りし時作る歌井戸王いどののおおきみすなはち和なごふる歌

味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隅 い積るま
でに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の 隠さ
ふべしや

歌意——味酒〔枕詞〕三輪の山よ。あをによし〔枕詞〕奈良山の山のまに隠れてしまふまで、道の曲が
り角が積もり重なって見えなくなるまで、よくよく見てゆきたいのに、何度も何度も見てやろうとする
その山を、無情にも雲が隠してよいものでしょうか。

反歌 三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや

歌意——三輪山を、こんなにも隠すのか。せめて雲だけでも情があつて欲しい。隠すなんてことが、あ
るものですか。

このように、長歌のあとには必ず反歌が応えています。これも連作の一つということが
できるでしょう。

この長歌の前には詞書が書かれています。詞書はもちろん歌の助けとなるものですが、
これは歌の序でもあり、説明文の役割を果たしています。現代短歌において用いる人はあ
まりありませんが、一首の独立性を助ける意味から、好んで用いている人もまれにはあり
ます。

万葉集の中には、長歌が数多く見られますが、平安時代以降は次第に衰えてしまい、現
代は全くといっていいぐらい詠まれなくなっています。

近代に目をむけてみますと、正岡子規が連作を試みています。「しひて筆を取りて」とい
う十首の連作で、「完璧なる連作の歌」と題し、残っています。

いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす

正岡子規

*詞書 一般的には歌の初めに歌つた趣意を書いたものを示す。この詞書に相当するものはすでに「万葉集」にも見えており、単なる説明にすぎない実用的な文と、「古今集」における恋歌や雅歌の序としての二様があり、「伊勢物語」から「大和物語」というように歌物語として発達して文学の一ジャンルを開いてゆく詞書もある

病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

などの一連です。十首あるうちの五首をあげました。死期のすでに迫っているのを自覚した、子規の生命への愛惜がどの一首にも見られ、同時にどの歌にも哀韻が込められており、ひびきあって悲歌となっています。

現代短歌でも、総合雑誌などに五十首詠、百首詠などの大作が発表されることがあります。その場合もやはり、一本に通ったテーマがあるのが多いようです。どんなに優れた一首一首であっても、一貫した歌の流れが連作の場合は必要であり、読む人の側からいっても、胸にひびくような連作のもつ独自の雰囲気や要求する感情の動くのは当然のことです。連作の意義は、一首の中では到底表現しきれない詩的感動の高まりを、まとまった歌数を集合させることによって、より力強いものにしようとするわけです。

そこではある程度限界の生じることまぬがれない事実です。同じ内容のものを連作として引き伸ばすことになれば、一首としての緊密度はゆるめられ、かなり印象の淡いものにもなりかねない欠点を、さらけ出してしまうのです。その反対に、一首一首が独立した形になっている場合は、例えば地名などの事柄がうるさく目ざわりになることなどもあり、どちらにしても難しい点があります。

連作として多く詠まれるものとしては、旅の歌、相聞の歌、挽歌などの、どちらかというところ、日常詠から少し離れた特別な状況を詠んだものに効果があがります。

斎藤茂吉の歌集の中にも、かなりの連歌が見られます。歌集「赤光」の中の「死にたま

*日常詠 特殊な素材を短歌素材として歌うのではなく、日常生活の平凡な素材を歌った短歌。

*赤光 明治三十八年から大正二年

に詠んだ八三四首を収めた斎藤茂吉の第一歌集。茂吉の名を一躍有名にし、かつ「アララギ」の存在を世に知らしめた画期的な歌集で、その強烈な個性は文壇にも衝撃を与えた。

ふ母〃の一連の挽歌は感動的です。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まれ乳足らひし母よ

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものもなし

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははその母は燃えゆきにけり

母の死を悼む一連の挽歌は、今も名歌として人々の胸の中に生きつづけ、万人の胸に迫る哀切のひびきを伝えているのです。この一首一首の挽歌は連作から切り離して一首一首として読んでも、完全に独立した形と雰囲気をもってゐるものであり、連作によりかかっている歌の短所をもったものは一首もない秀作ばかりです。

この歌集「赤光」の一連のように、非常に切迫した肉親や家族の死を悼む心情は、自ら溢れ出る極限的な悲哀感をもつものであり、その場の状況をはるかに超えた感動を、それぞれの胸に呼び起こさせる力があります。このように、人は思いがけない肉親の死などに直面した場合、その心情を何かの形で表現しなければ耐えられない思いに駆られるのです。歌を詠むものが、つぎつぎに連作を生み出してゆくのも、それは自然発生的といえるでしょう。「赤光」の一連のようなものを代表的な連歌といふことができるのです。

相聞歌の連作としては、何といつても与謝野晶子の「みだれ髪」が圧巻でしょう。

髪五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ

*みだれ髪 歌数は三九九首にのぼり、明治三十三年と三十四年（晶子二十三歳と二十四歳）の歌を「胭脂紫」「蓮の花船」「白百合」「はたち妻」「舞姫」「春思」の六章に構成したものの。西欧的美意識の葛藤混交するなかに、明治三十年代の浪漫主義を代表しうる一世界が華麗に展開されている。

血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど春を行く人神おとしめな

臙脂色えんじいろは誰にかたらむ血のゆらぎ春のおもひのさかりの命

細きわがうなじにあまる御手のべてささへたまへな帰る夜の神

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

これらの連歌は、青春の溢れる官能を幻想的に何はばからず高らかに謳い上げて、若い人々の心をゆさぶり、単に女性としてのみならず感性と尊厳の自覚に立って、伝統ひとすじの多くの歌人を驚かしたのです。

連作とはつまり独立した一首一首を一連として、ある特殊な状況や心情を表わす手段としてはまことに都合のよい形ということができるとは、それでは連作歌の長所について考えてみましょう。

あらかじめ二十首なり三十首なりのテーマを決めて、そのテーマにそって詠むということです。テーマが決まれば一つの素材をいくつにも分けて詠めるので、読者に無理にわかしてもらおうための余計な説明が不要になることです。相聞であれ、旅行歌であれ、挽歌であれ、テーマがあれば自らそこに焦点が定められるわけです。さらに、一首は他の一首に寄りかかれるという特典があるため、同じ事柄（地名など）を再び一首の中に詠み込まなくても、その事柄を詠んでいることがよくわかるという強味です。連作の中からただ一首ぬきだしてきたのでは、ちょっと理解しにくいと思われる作品でもその前後の歌をよく読んでみればすぐに理解できるといふようなことです。

では、短所について考えてみましょう。

まず、テーマが決められている場合はそのテーマにそわなければならぬため、やや窮屈な気持ちになってしまうこと。もちろん自発的に詠む場合は別ですが、同じような発想

の歌が並んだ場合には一首一首の独立性が稀薄となり、どれを読んでもあとに残るイメージはそう違わないことになり、せっかく骨を折って作った三十首詠が、これならば五首であっても十分ではないのか、と思わせるような結果となります。またいいかえれば、次のようなことにもなります。

連作の意義は、まとまった主題をまとまった構成のもとに、数多く詠みこなすということにありますが、注意しなければならないことは、ともすれば歌数のみにこだわらずに、安易な作り方に陥ってしまうのではないかという危惧のあることです。すらすらと数多く詠みこなした結果、表現が内容を支えきれず、せっかくの感動が表現不足で薄れてしまい、いわゆる散文調の安易な形になってしまっておそれがあります。連作という形に甘えて詠むことは、詩情をそこなうことの危険性をはらむことなのです。

以上のような連作の長所と短所をよく考慮し、連作ということの意義や性格を把握し、連作に取り組んでみることは、一つの素材に力を集中するという訓練にたいへん役立ち、実作の得難い勉強法ともなります。

さて、実際に連作に励んでみると次のようなことがよくあります。

ともかくも精魂を込めた連作が完成したとき、連作を詠もうとした意欲と動機にはいささかの不純さもなく、力強い作品ができたように思い、読み返してみます。詠み進めていた間は、連作にのめり込んでいたため気づかなかった欠点や、次第に目につきます。作っている間は、どの一首にも切実感を詠み込んだように思っていたにもかかわらず、あちこちにすき間が見えて、どうやら弱体の感じがします。とてもとも一首の独立性などはなく、鑑賞に耐えられる作品ではないかと思ったりします。あるいはまた、一首一首の中にあまりに重複した言葉が入り過ぎてうるさい感じがしたりします。

けれども自信を失ってはなりません。何ごとも修練が大切と考えて、大いに連作も試みてみましょう。

古語の生かし方

短歌は万葉時代からの古い歴史の中で、今も澁刺しちざらと生き続けている小詩型の日本の独自の文学です。

言葉には話し言葉（口語）と文章語（文語）とがあり、話し言葉は会話語、つまり生活している日常語のことです。現実的で明晰でなければなりません。文章語は文字に書いて文章として意志表示をするものです。

文語は動詞の活用の仕方が変化したりしますが、あまり時代によって変化をしません。口語は時代によって激しく変化します。また地方によっての違いも目立ちます。方言といいますが、それは口のあけ方などによる発音の差も大きく支配します。

短歌の場合はだいたい文語を用います。和歌の用語は古来から洗練を重ねてきました。この場合「古語」と「死語」とあることを知る必要があります。日常用語として使われなくなっているもの、文語として残っているものは生かして使った方がよく、締まった音と深い意味を持っているものは活用すべきです。ただし意味の通じなくなった死語は捨て去るべきです。古い言葉でも使って意味がよくわかり、音調がよくなるものと、使う効果のないものとは常識的にわかります。

古典として残った和歌の一番の魅力は何かといえますと、やはり滑らかな声調ということに尽きます。その声調は時代の移り変わりによって多少の違いはあっても、五・七・五・七・七の定型に正しく詠み込んだ言葉の調べは、いかにも耳に快くひびくものなのです。次に解説する古語である枕詞・序詞についても、この言葉の調べを整える、歌の声調の美しさを高めるということが大きな役割となります。

一 枕詞

枕詞は次のものを引き出す言葉で、この枕詞が効果的に働かなければならないのです。

枕詞は快い五句音の韻律をもって、一定の語の上にかかって修飾するか、または句調を整える役割を果たし、それぞれが一つの意味をもっているのです。

た・ま・きはる・宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野

歌意——宇智の大野に馬を並べて朝お踏みになるであろう。その草深い野を。
たまきはる——うち……魂が体のうちの方にある。

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり

斎藤茂吉

歌意——あかあかと一本の道が通っているわが命そのものまえに。
たまきはる——命……魂はうちにあるというのを超えて命そのものをさしている。

最初の歌の「たまきはる」は、宇智の枕詞で、次の歌の「たまきはる」は我が命の枕詞ですが、この言葉の解釈は「魂の極まる」という説があり、「内・命」を修飾する語です。つまり、自分の歌に使おうとすれば、「たまきはる命」「たまきはる内」などとなるのです。

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐる足乳根の母は死にたまふなり

斎藤茂吉

歌意——のどの赤い燕が二羽屋梁にいて（上の方より見ている。巢造りをしている）このときに（晩春）母の死が迫っている。

「たらちね」は、足乳根・垂乳根（乳を垂らす女の意）と書き、母・親の枕詞です。「たまきはる」よりは、今日でも歌の中に割合に多く取り入れられています。落語にも古典語として「たらちね」というのが残されています。

*屋梁 屋根の重みをささえるため、むねと直角に柱の上に横渡しにする材木。

ぬばたまの夜のふけぬれば久木おふる清き河原に千鳥しば鳴く

山辺赤人

歌意——夜がふけてゆくとひさぎの生えている清い河原に千鳥がしきりにないている。

例歌の「ぬばたまの」は夜にかかる枕詞ですが、この他に「黒・月・夕・暗き・今宵・夢・寝」などにかかる枕詞として、「烏羽玉」の字が当てられており、「むばたま」ともいいます。黒い実のことを意味し、「たらちね」と同じように、今日でも好んで歌に詠む人になりあります。

以上の他にも、枕詞は数多くあります。

「ひさかたの」は遙かなるの意味で「天・天・空・月・雨・雲・夜・光」などにかかります。「あしびきの」は、「山・峰」などにかかり、長いものをいいます。「しらぬひの」は、「つくし（筑紫）」にかかります。「むらぎも」は「心」にかかる、つまり内臓器官の中の肝のことです。「くさまくら」は、「草むすぶ・ゆふ・仮・つゆ」などにかかり、草を枕にして野宿するという意です。「あかねさす」は、茜色に照り映える意で、「日・昼・照る・君・紫」などにかかります。

万葉集をひもときますと、枕詞がよく用いられているのに驚きます。万葉人は「枕詞」が日常語と同じようにすらすらと出たのでしょうか。枕詞の用いられた例歌をあげてみましょう。

近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣麻呂の作る歌

玉禰 畝火の山の 檀原の 日知の 御代ゆ 生れましし 神のことごと 樛の木
いやつぎつぎに 天の下 知らしめししを 天にみつ 大和を置きて あをによし 奈
良山を越え いかさまに 思ほしめせか 天離る 夷にはあれど 石走る 淡海の國の
楽浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は 此處と聞

*久木 きささげまたはあかめがし
わの古名。

けども 大殿は此處と言へども 春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の 霧きれる も
もしきの 大宮處 見れば悲しも

歌意——神武天皇の御代以来お生まれになった天皇のすべてが、つぎつぎにお治めになった大和の国を捨てて、奈良山を越え、何とお思いになったからか、田舎ではあるが、近江の国大津宮で天下をお治めになったという天智天皇の皇居は、こと聞けけれど、御殿はここだというけれど、今は春草が繁く伸びている。霞が立って春の日ざしがにぶく霞んでいる。大宮の址を見れば心悲しい。

反歌 さざなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

歌意——さざなみの志賀の辛崎は昔と変わらずにあるが、(都が荒れ果ててしまったので)昔ここで遊んでいた大宮人の船をいくら待っても、再び見ることはできないのだ。

さざなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも

歌意——志賀の大わだは水が淀んで(人を待って)いるが、淀んでいても、昔の人に再び会うことができようか。できはしない。

この長歌と反歌は柿本人麻呂が近江の宮の址を旅したときの作です。あれほど栄えた都もあとかたもなく荒廃してしまった、という無常感が基調をなしています。枕詞がたくさん用いられているのご注目ください。繰り返し声高く朗読してみても、枕詞のもつそれぞれのムードをじっくり味わってください。

枕詞は声調を助けるものです。万葉集の中には枕詞を用いた長歌や短歌がたくさんあります。次にいくつか、枕詞の入った短歌の例歌をあげましょう。皆さんも朗々と吟じてください。幾度か吟じているうちに、皆さんの頭の中には、これらの歌がイメージを伴